

ティーチャートーク

◆ティーチャートーク

ネイティブの特に語学教師が非ネイティブの生徒に話すこと。

(例) 日本人の日本語教師がアメリカ人にわかりやすくゆっくり簡潔な日本語を使って話すこと。

◆フォーリナートーク

ネイティブが非ネイティブに話すこと。

(例) 日本人が韓国人に日本語でゆっくり簡単な言葉を選んで話すこと。

◆ティーチャートークのメリット

- ① 学生が確実に聞き取れることを増やせる。
- ② 理解できる知識が増えれば増えるほど理解力の速度が高まる。

◆ティーチャートークのデメリット

- ① ティーチャートークに慣れた学生は、ネイティブの環境では聞き取れない。
- ② ティーチャートークに慣れた学生は、ネイティブのスピードに慣れるのに時間がかかる。

◆言語学習プロセスの研究

- ① わからない単語を何度聞いたところで、わからないものはわからない。
(新出語彙をセンテンスカードで提示して、何度もリピートしたところで学生には理解できない。)
- ② 聞いたり見たりして理解できないものは、ただの雑音、ただの絵でしかない。
(絵カードの説明が難しい言葉による説明では、絵カードは何の意味もない。)

◆ティーチャートークの進め方

- ① 1回目は普通の日本語スピードで話す。
- ② 学生の反応を見ながら、理解していないと感じたら、もう一度同じことをゆっくり話す。
- ③ ②でダメなら表現を変えたり、ジェスチャーを入れたりする。

◆ティーチャートークの具体例(初級の学生には特に必要)

- ① 「みんなの日本語 第1課」

わたしは マイク・ミラー です。 ➡ 教師が自分を指さして、ゆっくり、「わたしは ○○(名前) です」と言う。

マイク・ミラーの絵カードを教師の顔の前にかざして、マイク・ミラーの絵カードを指さして、「わたしは マイク・ミラー です」と言う。

- ② 「みんなの日本語 第5課」

わたしは スーパー へ 行きます。 ➡ 「わたしは」で教師自身を指す、スーパーの図を提示、「へ」を強調しながらスーパーの図を指さして、「スーパーへ」、腕を左右伸ばして振りながら「行きます」とゆっくり言う。

- ③ 「みんなの日本語 第10課」

あります、います ➡ いろいろな「物」を提示もしくは指さして、「～あります」、人の顔を提示するか数人の学生を掌(指はダメ)で指して「～います」、それぞれゆっくり繰り返す。